



ロマンを追って

元大分市長 上田 保物語

最終章「思考回路」



デジタル版初版発行：2008年5月30日

最終章 ● 「思考回路」

- ・ もう一つの観光施設
- ・ ギヤマン張りの天井
- ・ 「海底水族館」構想
- ・ 自然水族館プラン
- ・ 回遊水槽の原型
- ・ ピルキントン製ガラスの調達
- ・ 大分市議会に協力要請
- ・ 「マリーンパレス」開館
- ・ 陰の功労者
- ・ 回遊水槽が主流に
- ・ 手塩にかけて人材
- ・ 平松、大分県知事に
- ・ 三先達、相次ぎ逝く

※あとがき ※参考文献

※奥付け／デジタルブックについて



●書籍案内

「ロマンを追って
一元大分市長上田保物語」

著者：中川 郁二

A5 版 194 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2003 年 2 月 15 日

定価：1600 円（税込み）

購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ

TEL：097-538-9662 「合同新聞の本」Web ページ

発刊に当たって

▽月刊誌「ミックス」(大分合同新聞社発行)で連載した「政治は創造なり・元大分市長上田保物語」(2001 年 5 月号～2002 年 4 月号)に若干手直しを加え、改題して 2003 年 2 月に書籍「ロマンを追って一元大分市長上田保物語」を発刊。その書籍をデジタル化したのが、今回のデジタルブックです。 (本書に登場する人物の年齢や肩書き、施設名称等は、「ミックス」連載時点のもの)

最終章 「思考回路」

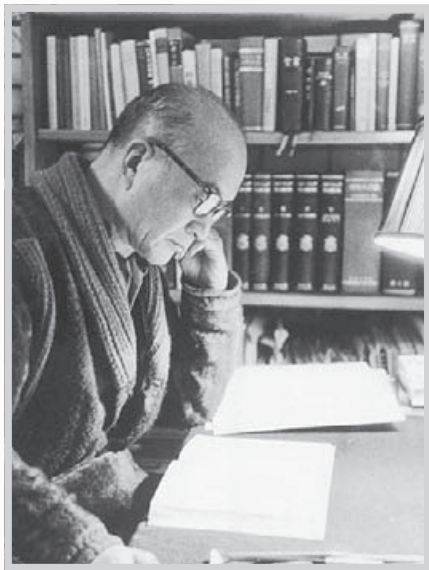
もう一つの観光施設

上田保はいつ頃から、どんなきっかけで、どんな思考回路を経て奇想天外な水族館構想を思いついたのだろうか。高崎山自然動物園の入園客が年間九十万人に迫ろうとしていた昭和三十三年（一九五八）、同園入り口の駐車場だけでは、急増するマイカーや観光バスを収容しきれなくなった。

このため、市長三期目の保は高崎山沖を埋め立て、新たに駐車場用地を確保しようと計画した。その際、彼は「九十万人もの入園客をそのままにするのはもったいない。新駐車場用地に足止めさせるもう一つの観光施設はできないか」と考え、思案の末にたどりついたのが、「海岸の観光施設といえば水族館しかない。それも魚をケースに閉じ込める既存のものではなく、全く新しいタイプの水族館」だった。

では、どんな水族館にしたらいいのか。野生ザルのえづけのときと同じように「苦吟」が続く。自宅の書斎で推考を重ねて

自宅の書斎で読書する保



いるうち頭が疲れると、彼はよく読書をして気分転換を図った。それは古文であったり、随筆や現代小説、あるいはキリスト教関係の書物だったりする。

ギヤマン張りの天井

その時は、たまたま山弥長者に触れている井原西鶴の「日本永代蔵」や貝原益軒の「豊国紀行」、「守田家過去帳」「雉城雑誌」などの文献、史料が机の上に置いてあった。それらの中から、保は長者伝説をまとめた古い史料を手に取り、パラパラとめくってみた。次のくだりが目に留まる。

「ある日、府内城主日根野吉明が長者の屋敷を訪れたと

き、長者の息子が寝たまままで応対し、ギヤマン（ガラス）張りの天井の上で飼っていた金魚を足で指した。その態度に烈火のごとく怒った吉明は長者一族をことごとく処刑した」という内容。

へ山弥長者と称される山弥之助（姓は守田または古田ともいう）は府内の一介の行商人にすぎなかったが、行商中に日向の地で大鉱脈を発見して西国一の大長者となり、府内城下に大邸宅を構えたと伝えられている。文献で山弥一族の悲劇を知った保は大分市長になったばかりの昭和二十三年に市内の万寿寺で法要を営み、翌二十四年には長者屋敷跡（大分市大手町）に碑を建てた。保にとって、山弥長者は特別の思い入れがある」



山弥長者屋敷跡碑

「海底水族館」構想

「ギヤマン張りの天井の上で飼っていた金魚」。待てよ、これは面白い。何か使えそうだ。史料を読み直す保は目を輝かせた。このくだりが大きなヒントになる。三十五年、海岸に巨大な海水池を設けてこの中に魚を泳がせ、海底に大型のガラスパイプ（幅十メートル、高さ二メートル）を設置。ちやうど山弥長者らがガラス天井で飼っている金魚を下から仰ぎ見たように、頭上の海中を遊泳する魚群をガラスパイプの中から観察できる「海底水族館」構想を練り上げる。

早速、国内のガラスメーカーに問い合わせたが、海底の水圧に耐え、しかも人が通れるようなガラスパイプの製造は不可能だと一笑に付された。

自然水族館プラン

これでひるむような保ではなかった。さらに推考を重ねた結

果、三十六年に第二

弾の構想を打ち上げ

る。それによると、

海底水族館を陸上に

移し、幅十二メー

トル、高さ三メー

トルの水路を楕円形にし

て延長百六十メー

自然水族館プランを報道する大分合同新聞

(昭和三十六年七月十五日付)



ル設置する。その中にアーチ型のガラス張り通路（幅六メートル）を通し、そのガラス張り通路の中に人が入って水路を遊泳する魚を見物しようという趣向。これを「自然水族館」と名付けた。

保はその設計を京都大学理学部の宮地伝三郎教授（動物学）と山本和夫教授（建築学）に依頼する。両教授から「水圧に耐えるガラスさえできれば実現の可能性はある」というお墨付きをもらい、このユニークな水族館構想は現実味を帯びてくる。だが、この段階でもやはり、「水圧に耐えるガラス」が厚い壁になった。

回遊水槽の原型

保の「試行錯誤」はさらに続く。彼は「水槽に潮の流れを作れないか」「魚がもつと速く、自由に泳げないか」「魚が一日に泳ぐ距離や習性、生態などが観察できないか」「人と魚が楽しく交歓できないか」の四条件にポイントを絞り、寝てもさめても思案に暮れる。便秘性の彼はトイレの中で長時間にわたり考え込むこともたびたび。その都度、心配した美苗が「大丈夫ですか」とトイレのドアをたたいた。

悪戦苦闘の末、彼がノートにスケッチ風の図案を走り書きしたのが、世界初のドーナツ型回遊水槽の原型となった。総ガラス張りのドーナツ型水槽に圧力をかけて海水を噴出させ、これに魚を放せば、魚は海流のような流れの中を勢いよく泳ぐことができる。

総ガラス張りなので外側から観察ができ、人と魚の交歓も実現する。水槽に設けたパイプの中に人が入って内側から魚の遊泳を見物するという、これまでの構想とは正反対になっている。まさに発想の転換だった。

これで、彼がポイントにした四条件をすべて満たすことになるのだ。あとは、水圧に耐えるガラスをいかに調達するかであった。国産のガラスではどうにもならない。

ピルキントン製ガラスの調達

大分・鶴崎臨海工業地帯の実現のときでもそうだったが、ここでも女婿で通産省産業施設課長補佐だった平松守彦が耳よりな情報を保にもたらした。

「お父さん、イギリスにピルキントンというガラスメーカーがありましてね。その技術ならうまくいくと思いますよ」と海外事情に詳しい平松からの電話連絡に保は狂喜した。「そのなんとかという会社の資料を至急取り寄せてくれ」と依頼した保の声はうわずっていた。

保は早速、専門家にドーナツ型回遊水槽の図案を見せて水圧を計算させた。その数値と平松から送ってきたピルキントン社のデータを比較すると、同社製のガラスは想定水圧を完全にクリアすることが分かった。

この時点で、ドーナツ型回遊水槽の成功の見通しがついたといつてよい。ピルキントン社は当時、潜水艦の覗き窓用の特殊ガラスを製造するメーカーとしても知られていた。

保は後にピルキンソン社に厚さ三十八ミリ（国産では十二ミリが限度）のガラスを大量に発注することになるが、この発注や輸入いっさいの事務処理を平松が協力する。

大分市議会に協力要請

市長を退いた保は三十八年九月の大分市大分地区全員協議会に画期的なアイデアをひっさげて協力を要請した。それによると、建設中の新駐車場用地（三十九年九月に完成）の一部を市から無償提供してもらい、ここに総工費二億二千万円で新タイプの水族館を建設し、ドーナツ型回遊水槽を設置する。

さらに市が総工費の保証責任を持つてくれれば財団法人大分観光公社を設立し、運営に当たらせる。年収から必要経費を除いた分は全て市の収入として寄付する——という骨子になっている。

聞いていた議員たちはその奇抜さにあっけにとられ、拒否反応の空気が強かった。だが、保が計画の裏付けとなるきめ細かなデータや数値を次々に挙げるうち、賛同者も出てきた。結局、市議会が中心となって全国の水族館の実態調査をし、その結果をみて結論を出そうということになった。

川上勘一議長ら議員八人が二班に分かれて各地の水族館視察に出かけたが、当時の既存水族館は軒並みに赤字だっただけに、結果報告は悲観的な内容となった。このため、結論は出ず、提案の水族館建設問題は棚上げとなる。

市の経営参加を諦めた保は、富士紡、大分交通などの企業や

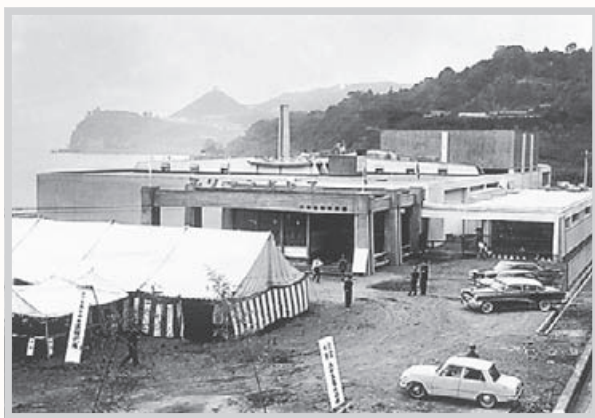
一万田尚登、西村英一、木下郁ら友人の協力を得て、資本金八千万円で株式会社大分生態水族館を設立し、民間で水族館の建設と運営をしていくことに方向転換。

翌三十九年四月の大分市議会に高崎山駐車場の一部の有償貸与を申し出た。安東市長と川上議長が議員たちに働きかけるなどの「援護射撃」をした結果、六月の定例議会で保の申し入れは承認される。

「マリンパレス」開館

こうして、同年十月三十一日、高崎山自然動物園前の埋め立て地に完成した大分生態水族館「マリンパレス」の開館式が現地で行われた。創業者の保をはじめ、初代館長の堀家邦男、

マリンパレスの開館式場



木下知事、安東大分、荒金別府両市長、宮地京大名誉教授、二宮金一郎（二宮マリンパレス会長の父で大分魚市場社長、マリンパレスの取締役）らが出席。

神事のあと、晴れやかな表情をした保が「自由奔放の夢を描いてきたが、みなさんのご協力でその夢がやっと実現しました」とあいさつ。木下ら来賓は「素晴らしい画期的



高松史朗館長

な水族館。高崎山のサルに続いて大分市にまた新しい名所ができた」と祝辞を述べた。

出席者たちは、幅二・三メートル、高さ二・三メートル、周囲六十一メートルのドーナツ型回遊水槽の海水の流れに泳ぎ回るハマチ、マダイ、クエ、コロエイの魚群やアクアラングをつけた海女が魚にえさを与えているシーンに目を見張った。

早くから保のアイデアを評価していた木下は「あいつはわたしと同じの古希（七〇）なのに、脳みその方はいっこうにトシを取らんのう」と舌を巻いた。

陰の功労者

世界初のドーナツ型回遊水槽の水族館だけに全国的な話題となり、入館者数は一日平均二千七百人、一カ月の収入は一千五十万円と好調なすべり出しだった。

その後、保はイシダイの条件反射を応用した「魚の曲芸」（四十一年）、目の不自由な人でも触って楽しめる「耳と手で見る魚の国」（四十二年）、「移動水族館開始」（五十六年）、「世界

初のアオギスの産卵、ふ化に成功」（五十七年）など次々とヒット企画を打ち出し、入館客を集めた。

保のアイデアや企画を実現させた陰の功労者は二代目館

長の高松史朗である。彼は福岡県小郡市出身で京都大学理学部大学院動物生理・生態学専攻博士課程卒業後、京大理学部付属瀬戸臨海実験所研究員を経てマリーンパレスに迎えられた。誠実で温厚な彼は、上田社長のせっかちで無理な注文を嫌な顔ひとつせず、こなしていた。

特に世界の水産関係の専門家をも驚かせた「魚の曲芸」の開発は特筆に値する。これは、保の「高崎山の野生ザルのえづけは条件反射を応用してものにした。海の魚もなにかできるはずだ」という特命で、高松をキャップとする研究グループが刻苦勉勵の末、成功したものだ。

また水族館に飼っている魚介類の学術論文のまとめも課せられ、マリーンパレスが発表した論文は多数にのぼっている。平成二年一月一日未明、大分市南春日町の自宅で起きた不慮の事故で、彼は和子夫人とともに焼死する。

マリーンパレスを見物に来た平松の父佐藤折次（左端）と平松（中央）、保



高松の死後、大阪市出身の川原大（ひろし）が後を継ぎ、三代目館長に就任する。彼は京大理学部動物生態学科卒業後、大学の先輩でもある高松のひきで研究員として入社。研究活動の傍ら、縄張りとかんかの習性を応用した「キツシンググラミー（淡水熱帯魚）のキツス」を三年がかりで成功させ、ほかに「タ

コの大ちゃん宝さがし”カメの運動会”などのショーも開発している。

保がドーナツ型回遊水槽を考案して、その建設に着手したとき、株主の間に「特許を取得しなければ、世界初の魅力が薄れる」という意見が出たが、保は「よそが真似をすれば、それを上回るアイデアで勝負する」と言って取り合わなかった。

回遊水槽が主流に

保自身もある程度予想はしていたが、その後、回遊水槽方式の水族館が続々開業し、主流となった。世界の水族館を一変させたといつてよい。国産でも耐圧性の優れたアクリルが製造されるようになってから水槽が大型化しているが、流れのある海水または淡水の中で魚が自由に遊泳する——といった保の着想はそのまま生かされている。

マリンワールドの大水槽



福岡市の「マリンワールド」

海の「中道」には高さ七メートル、長さ二十五メートル、奥行き十メートルの大水槽が設置され、中に八十種類、約一万匹の魚が遊泳している。

脇坂征一郎同館長は「この水槽はドーナツ型にこそなっていないが、基本的な機能は上田社長が考案した水槽

手塩にかけた人材



マリーンワールドの
脇坂征一館長

と全く同じ。世界を見回しても、あの革命的なマリーンパレスの水槽を上回るものはまだできていない」と言い切る。

北九州市出身で日本大学農獣医学部水産科卒の脇坂は昭和四十二年（一九六七）、マリーンパレスに入社した。いったん、不採用となったのを、保にトツトツとした口調で「雑用係でも構いません。貴方が考案した素晴らしい水族館で働きたい」と再三再四、拝み倒してようやく雇われた変わり種である。

保は社員を採用する際には必ずといていいほど、どんなエリートでもいったん採用を断った。応募した本人が再度チャレンジしてくるかどうか、その熱意を試したかったからである。先に紹介した川原でさえも一度、不採用を言い渡されている。だが脇坂については、エリート好みの保は雇う気はさらさらなかった。

やっと採用された脇坂は人一倍研究熱心で、我慢強く、コマネズミのように動き回り仕事に精を出した。やがて高松の研究室に配属され、魚の生態研究に没頭する。その傍らで保にマナーから仕事、人生の生き方までたたき込まれた。

マリーンパレスで培った魚類生態の知識や調教のノウハウを買われて、マリーンワールドの建設準備委員として迎えられ、平

成六年、館長兼常務取締役役に就任した。

保の専用運転手を長年務め、マリーンパレスの取締役総務部長になった津野紀信も、脇坂と同様に保が手塩にかけて育て上げた人材である。

保に請われて昭和四十五年（一九七〇）から四年間、マリーンパレスの専務を務めた是永勉（八六）Ⅱ大分市新春日町Ⅱは「この人・上田保」に興味深いエピソードを紹介している。

それによると、マリーンパレスの玄関に据えられたデンマークからの人魚姫像の周りに石を並べるようになった。生野祥雲斎の助言もあって、高崎山裏に流れている大分川支流の川石を採取することになり、大分土木事務所からようやく許可をもらった。

社員を総動員して探し出した多くの川石をトラックで運び、夜遅くまでヘトヘトになりながら、像の周りに並べた。それを見た保は満足そうに引き揚げたが、翌朝、出社してみると、すでに来ていた保は「キミ、あの石は駄目だ。すぐ運び出しなさい。僕が石屋に頼んだ別の石を入れるから」…。

「あの時はあ然として声も出なかった。僕が入社する際には、『上田社長は人使いが荒くて三、四カ月も持たないよ』と忠告してくれた知人もいたが、僕は四年間仕えた。厳しい半面、情の厚いところもあり、まっ正直な人だった」と是永は述懐する。

大分市出身の彼は大分新聞、福岡日日、同盟通信（現共同通信）を経て大分合同新聞社へ。社会部長、事業部長、論説委員を務め、別府支社長時代に労作「別府今昔」を著している。

保はマリーンパレス創業七周年記念事業として四十六年、「西

洋音楽発祥記念像」（富永直樹作）を県庁の敷地に建てた。市長時代に建設した大手公園や遊歩公園には、「聖フランシスコ・ザビエル像」（佐藤忠良作）や「西洋医術発祥記念像」（古賀忠雄作）、「育児院と牛乳の碑」（円鏑勝三作）、「西洋劇発祥記念碑」（舟越保武作）、「伊東ドン・マンショの像」（北村西望作）など中世のザビエル布教にまつわる銅像や記念碑を次々に設置した。市長時代に建てたのを加えるとその数は十九にのぼる。

平松、大分県知事に

一方、平松守彦はその後、産業公害課長（昭和三十九年）、石油計画課長（四十年）、電子政策課長（四十四年）、国土庁地方振興局審議官（四十九年）を経て、当時の立木勝大分県知事に請われ、五十年、副知事に就任した。この間、妻千鶴子が四十五歳で病没（四十五年三月二十一日）。五十一年、大分市の医師三原基の三女、照子と再婚。五十四年四月の知事選で初当選。翌年の市町村長との話し合いの席上、「一村一品運動」を提唱し、国際的にも知られる知事になる。

平松は「尊敬する人物を尋ねられたら、真っ先に義父（保）の名前を挙げている。



聖フランシスコ・ザビエル像（大分市・大手公園）



立木前知事(右)から
バトンタッチされる平松新知事

その義父から『政治は創造なり』といつも聞かされ、その信条に従っているが、数々の実績を残した義父の足もとにも及ばない」と話す。

人は晩年になると、表彰や勲章を欲しがるものだが、保はそうしたものをも嫌いだ。受け入れたのは次の三つである。▽第五回大分合同新聞文化賞Ⅱ地方文化Ⅱ(昭和二十八年)▽大分市名誉市民

(同三十八年)▽聖大グレゴリオ騎士団章(同四十九年)

かつて社会党市議として、キリシタン文化センター計画やロザリオ工場問題を追及した柴田明(七五)Ⅱ大分市田中町Ⅱは「大分市の戦災復興といい、大分・鶴崎臨海工業地帯の建設といい、上田さんは実行力のある郷土の偉大な先輩だ。また豊かな発想で高崎山のサル寄せやユニークな水族館などの財産も残してくれた。なによりも、借金(起債)に頼らず、自主財源の確保に努力した姿勢を見習わなければならない」と、財政がパンク寸前の国や自治体に警鐘を鳴らす。

三先達、相次ぎ逝く

四十八年(一九七三)五月、車いすの福田平八郎は長男宗平、



生前の木下(左)と保

主治医らを伴い、里帰りしている。大分空港まで出迎えた保は平八郎ら一行を車二台で四日間にあたり、国東半島や臼杵市、大分市の平八郎の生家跡などへ案内した。

一行が大分空港を発つとき、二人は「長生きしろよ」「ありがとう。実に楽しい旅だったよ」と言い交わし

別れたが、この再会が最後となった。

平八郎は翌四十九年三月二十二日午後六時二十分、急性肺炎のため国立京都病院で死去。八十二歳。三十六年に文化勲章受章。

保はその後、動脈瘤を患い、大分市西春日の自宅で点滴を受けるなどの生活を送っていた。

五十五年五月二十九日、国立別府病院で大動脈瘤を手術した木下を保は車いすを使い見舞った。保は「苦しいか」と声をかけた。ベッドに痛々しく横たわっている木下は微かに笑みを浮かべながら保の手を握りしめ、いつまでも放そうとしなかった。目頭に薄っすら涙をためている。保は「頑張れよ」と励まし、病院を後にした。

それから八日後の六月六日朝、保は自宅で朝風呂から上がり、体を拭いてもらっている最中に崩れるように倒れ、そのまま静

かに息を引き取った。死亡時間午前十一時二十分、死因急性心不全。八十五歳。

保の後を追うように、十三日後の十九日午後五時五十分、盟友の木下が心筋梗塞のため国立別府病院で死去。八十六歳。三十九年に大分合同新聞文化賞受賞。保と木下の二人は生年も、死亡年も同じである。

保はいま大分市の丸山墓地公園の墓で、長女美穂子（昭和二年十一月十日、没。五歳）、美苗（昭和六十三年五月十六日、没。八十五歳）、千鶴子（注、分骨されて納骨されている）とともに永眠している。

保と木下が亡くなった年の二年後の五十七年四月、大分城址公園の東側に「木下郁・上田保先生像」が据えられた。大分県知事を退任して県立美術館館長に就任した立木勝が代表世話人になって「銅像建設期成会」を発足させ、県内外から建設寄金を集めて実現したものだ。

制作者は日本芸術会員で日展理事長の富永直樹。向かって左側に保が右腕を伸ばして人差し指を差し、右側に木下が杖で立っている。

銅像の台座の側面には「戦災復興と大分地区新産都の建設に

当たっては、先見、



木下、上田両雄の像

独創、清廉など天性の美質に加え、肝胆相照らす永年の親交より県市一体、特有の政治力を発揮して

新生大分の基盤を確立したその功績は誠に拔群であつた」と二人を称える文章が刻み込まれてある。

保が遺した大分生態水族館「マリンパレス」は高崎山海岸線の埋め立て地に近く移転し、新しい装いで平成十六年オープンを目指す。現在、同水族館は二宮会長、橋本均社長（臼杵市出身）、川原館長（常務）の新体制で運営されている。橋本社長は保の甥庫生が継いでいる。

へ二万田尚登は昭和五十九年一月二十二日午前四時半、心不全のため東京慈恵医大付属病院で死去。九十歳。安東玉彦は平成二年九月十九日午前六時十分、心不全のため大分市医師会立アルメイダ病院で死去。九十歳。四十六年に大分合同新聞文化賞受賞（文中敬称略）

おわり

あとがき

本書は大分合同新聞社が発行している月刊誌「ミックス」の二〇〇一年五月号から二〇〇二年四月号まで十二回にわたって連載した「政治は創造なり・元大分市長上田保物語」を若干手直しをし、改題したものである。原題の「政治は創造なり」は上田氏の女婿で大分県知事の平松守彦氏が上田氏からいつも聞かされたという、この教示の言葉をそっくり使わせていただいた。執筆中はできるだけ私情を挟まず、一定の距離を置いたつもりだが、書き終わってみて、あらためて主人公上田氏の足跡の大きさに畏敬の念を覚える。なかでも驚きを禁じ得なかったのは、氏が最も情熱を燃やしながら幻に終わった「キシタ文化センター」建設計画に投じた費用いっさいを私費で賄ったことだ。

例えば、建設費を捻出しようと、独自でロザリオ製造工場を建設し、自ら運営したが、その人件費などの運営費は自分の給与やボーナス、退職金の前借り、寄付金などを充て、終始公金を当てになかった。同文化センターが完成した暁には市に寄贈しようと計画したのである。

さらに公私のけじめの厳しかったことは本書で紹介した通りである。上田氏がもし平成の世に生きているならば、金銭感覚が麻痺した政官界の現状をどう見るか。氏の生の声を聞きたいと思うのは、私だけではあるまい。

また目を見張らされたのは、上田氏の多彩で広範な人脈である。それも学閥、エリート族によるものではなく、自ら培った

つながりだった。彼ほど「一期一会」を大事にした人はざらにおるまい。予算獲得で上田市長から陳情攻勢をかけられた中央官庁の高官でさえ、彼の熱心さに魅せられ、後に「上田人脈」に組み込まれている。

私ごとだが、上田氏との出会いはちょうど市政担当をした記者駆け出しのころだった。氏はすでに市長を引退し、開館してまもない「マリーンパレス」に経営者としての情熱を注ぎ込んでおられた。いつも巧みな話術で周囲を笑わせ、アイデアに富む企画、話題を提供してはマスコミを引きつけていた。

市政担当をしていた時の市長は安東玉彦氏だった。私は安東市政を批判する記事を何度か書いたが、氏は不機嫌な表情をされることもなく、いつも気持ちよく会っていた。上田、安東両氏を取り上げる機会に恵まれたのは何かのご縁があったのではないかとつくづく思う。

また上田氏が高崎山の野生ザルのえづけに成功して開園した「高崎山自然動物園」は今年でちょうど開園五十周年に当たる。その記念すべき節目の年に本書の出版が実現したのは実に感慨無量だ。

本書に登場する高齢の方は年齢をできるだけ付記したが、その年齢は「政治は創造なり」が「ミックス」に掲載された当時のものである。

終わりに貴重な話や助言を聞かせていただいたり、写真、資料を提供してくださった方々に、心からお礼申し上げます。

平成十五年一月

中川 郁二

【参考文献・資料】

▽上田保「日誌」（昭和三十年代～五十年代）▽「この人・上田保」（上田保追悼録刊行委員会）▽上田保「趣味の法律」、「趣味の法律・犯罪捜査から死刑まで」（以上、趣味の教育普及会）▽上田保、菊本治男「趣味の法律」（省光社）▽大分市議会議事録（昭和二十年代～四十年代）▽伊谷純一郎「高崎山のサル」（講談社文庫）▽火野葦平「ただいま零匹」（東方社）▽「木下郁」（木下郁後援会）

▽木下郁「知事十六年・思い出すまま」（西日本新聞社）▽佐藤太一「木下県政余話」▽「立木勝を偲んで」（「立木勝を偲んで」刊行発起人会）▽「一万田尚登伝記・追悼録」（一万田尚登伝記・追悼録刊行会）

▽安東玉彦「市政随想」、「問わず語り」（以上、安東玉彦図書刊行会）、「あの頃あの人」（昭和五十六年二月八日～七月三十一日付大分合同新聞に掲載）

▽平松守彦「地方からの発想」（岩波新書）、「一身にして二生」（新潮社）、「私の履歴書」（平成四年六月一日～三十日付日本経済新聞に掲載）▽徳丸壮也「コロンブスの卵を生む男・平松守彦の発想と行動」（日本経済新聞社）▽宮崎豊「福田平八郎」▽清原宣雄「物集高見」▽田村卓夫「朝倉文夫」▽「大分県教育百年史」（以上、大分県教育委員会）▽堀正三「朝倉文夫の青春」（国文社）

▽物集高量「百三歳。本日も晴天なり」、「百歳折り返し点」、「続百歳折り返し点」（以上、日本出版社）▽奥田恵瑞、秀「物集

高世評伝」(続群書類従完成会)

▽狭間久「大分県文化百年史」▽清原芳治「大分県の戦後政治Ⅰ、Ⅱ」(以上、大分合同新聞社)▽梅木秀徳「大分の伝説上巻」(大分図書)▽永松秀敏「シリーズ人物・おいたを支えた人々」(大分県地域経済情報センター)

▽貝原益軒「豊国紀行」▽井原西鶴「日本永代蔵」(岩波文庫)
▽「大分人脈」(西日本新聞社)▽飯島貞一、宇都宮綱之「日本の臨海工業地帯」(通商産業研究社)▽上林貞治郎「臨海工業地帯の分析」(新日本出版社)▽「駅館川総合開発と大分・鶴崎臨海工業地帯」(大分県立教育研究所)▽古茂田信男、島田芳文、矢沢保、横沢千秋「日本流行歌史」(社会思想社)▽瓜生忠夫「映画」(三省堂)▽谷川義雄「年表100年史」(風涛社)▽豊田寛三、加藤泰信、末広利人「大分県の百年」(山川出版社)

▽「大中三十七期生一言録」(大中三七会)▽「創立90周年誌」(大分上野丘高校)▽「上野丘百年史」(上野丘「百年史」編集委員会)▽「大分市史中巻、下巻」(大分市)▽「目で見る大分100年」(郷土出版社)▽「マリンパレス・30年の歩み」(マリンパレス)▽「一粒の麦地に落ちて・創立百周年記念誌」(大分カトリック教会)▽「物集高見の「しきしまのみち」」▽「物集国学三代の光芒」(以上、きつき城下町資料館)

▽明治時代から昭和十年代までの豊州新報、大分新聞、昭和二十年代から五十年代までの大分合同、西日本、朝日、毎日、読売、日本経済各新聞▽平成二年一月三日付、同十三年八月二十日付各大分合同新聞朝刊



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「ロマンを追って—元大分市長上田保物語—」 最終章●「思考回路」

2008 年 5 月 30 日初版発行

著者 中川 郁二

原著 2003 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社／製作：大分合同新聞社文化センター／印刷：佐伯印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内）

© 大分合同新聞社

著者略歴 ◇ 中川 郁二
一九三七年生まれ、別府市出身。福岡県立修猷館高、早稲田大学卒。民間企業勤務を経て、大分合同新聞社入社。報道部長、別府支社編集部長、読者情報部長、論説委員、編集委員。